国立国語研究所学術情報リポジトリ

A report on the Uwajima dialect accent

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 誠治, SHIMIZU, Masaharu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002155

『日本語科学』19(2006年4月) 99-118 [調査報告]

宇和島(うわじま)方言アクセントについて

清水　誠治

キーワード
宇和島方言，アクセント体系，中輪式，複合語のアクセント

要　旨

いわゆる京阪系のアクセントが広く分布する四国の中にあって，いわゆる東京式アクセントの行なわれている地域として知られていながら，これまで具体的な報告のなかった宇和島方言アクセントでは，句頭から高く始まるのを典型とする音調型であること，動詞においてモーラ音素が核を担う現象が確認されること，3拍名詞については2・4・5類が統合し7類が3つに下位分類されること，複合名詞のアクセントについては基本的に前部要素が関与しないタイプ（Y型）であること，複合動詞のアクセント規則が広島市などについて報告されているものと共通すること，そして，アクセント体系としては中輪式に分類されるものであることなどについて，はじめて具体的に報告する。

1. 先行研究

宇和島のアクセントを学会に最初に報告したのは，筆者の調べた限り金田一(1940)で，話者などの詳細は明らかでないが，「天沼寧君の御調査に従ふ」(p.90) と断った後，2拍名詞について，「第一類－第五類を通じて殆ど東京と一致する」(pp.90-91) とし，「乙種アクセント（東京語に近い)」(p.89) に分類している。その後，金田一(1974, 1977)の巻末にある分布図の中では，宇和島のアクセントは，金田一氏が東京と近い，ないし似ているとする体系のうち，岡山市，名古屋市などと同じ「東京式内輪系」ないし「内輪東京式」の一つとして位置付けられている。

金田一氏の「東京語に近い」とする見方は，その後の山名(1956)，平山(1957)，杉山(1960)，更に，70年代に入って，国立国語研究所が主体となって行なった，宇和島から八幡浜(やわたはま)にかけての百余地点における，当時の中学生を対象とした，2拍名詞の調査に基づく真田(1985)でも追認されている。

このように，宇和島方言アクセントに関する先行研究の見方は，根幹にかかわる大まかな分類では全て一致していると見てよい。

ところが，細部に目をやると相違がみられる。その一つに音調型の問題がある。

検証の前に，本稿で用いる記号について説明する。

○＝任意の自立語の拍，▽＝任意の付属語の拍，

「＝上昇（「高く始まる」も含む)，

’＝大幅な下降（音韻論的な表記では「下げ核」)，”＝拍内下降

また，拍に対応する音階を，H＝高，L＝低でも示す。更に，核の有無とその位置は数字に置き換えて示すこともある。複合語については，核の位置を後ろから数えたマイナス表記にして示すこともある。

さて，宇和島方言アクセントをはじめて報告した上記金田一(1940：100)にある2拍名詞のアクセントについての記述から，記号や用語を本稿のものに置き換えて示せば以下のようになる。

1類＝「○○▽（＝ＨＨＨ）

2・3類＝「○○’▽（＝ＨＨＬ）

4・5類＝「○’○（＝ＨＬ）・「○○’▽（＝ＨＨＬ）

今，4・5類の発話環境による実現型の相違は置いておくとして，注目したいのは，頭高型以外でも初頭拍から既に高く，東京方言のような2拍目から上昇するものでないという点である。この観察は，後の金田一(1977：155)にも踏襲されている。

ただ，この高さは，近畿方面の方言等のように低く始まる系列と対立して存在するようなものではないらしい。

なお，この初頭拍から高く始まる音調について，上野(1984：370)では，「語」ではなく「句」の頭から高いものであるという見解が示され，｛「○○（…)｝という「句音調」の実現と解釈している。

一方，杉山(1960：75)では異なる記述がされている。そこでは，1・2拍名詞の助詞付きの形と2拍動詞及び3拍形容詞の終止形の例を各類4例ずつあげて，「乙種[＝東京方言など，筆者注]の標準型に同じ」と分析している（ただし，1拍名詞2類が助詞付きは低平で出て，1類の助詞が高くなるものと区別されている点は注意を要する。例．柄が＝ＬＨ／名が＝ＬＬ）が，文節の頭の音調の出方は，東京方言などのように，頭高型以外の1拍目は低く出るように記述されている（飴が＝ＬＨＨ)。

その後，1973年当時の中学生から得た2拍名詞のデータを基に分析した真田(1985)では，宇和島市中心部に分布する氏の言う「宇和島式」の1類と2・3類の代表的な音調型に，東京方言などと同じく初頭拍の低い○「○（▽）や○「○（’▽）を挙げている。

また，ネイティヴによる報告の篠崎（1987：4-5）で，「地方別音韻表」として表に記されたもの（「音韻表」とはあるが，挙がっているのは音調型と見られる）は，初頭1拍目の低いものである。

このように，初頭拍の高さに関しては二説がある。

ところで，上記金田一(1940)の記述には，4・5類の発話環境による型の相違が見られる。これが先行研究間の部分的な相違点の二つ目である。

しかしながら，それ以後の「宇和島のアクセント」の報告という場合に金田一氏と同じ4・5類の型の報告をしているものはない。また，金田一氏自身，その後の金田一(1974,1977)ではこの記述に言及しないままいわゆる東京式に分類しているので，あるいは誤植だったのかも知れない。

2. 本稿の目的と方法

2.1. 目的と方法

本稿で扱う「宇和島方言アクセント」は，宇和島市中心部に分布する，2拍名詞の類別体系が「1類／2・3類／4・5類」という，先行研究で宇和島の典型的なものとして扱われてきた体系である。ここではまず，先行研究間で相違のみられる音調型の問題について確認することからはじめる。

次に，アクセント体系と類別体系について，今一度検証する。この点では，従来の報告とは異なる点や触れ残された特徴的な現象がわかっている。

また，複合語のアクセントについても，その実例や，規則・傾向についてかんたんながらはじめて報告する。

そして，それらの分析結果をもとに，全国のアクセント分布の中での位置についても今一度確認する。

筆者の宇和島調査は現在も進行中であり，本稿も中間報告という形になるが，この先この地域のアクセント調査を進める上でも，また，通時的考察を行なう上でも，四国の中でいわゆる東京式の行なわれている地域として注目すべきところだけに，今の段階でわかっていることを報告し，問題点を整理しておくことの意味は小さくないと考える。

2.2. 調査について

本稿に関係する調査は，1991年から現在まで続けているものである。

宇和島方言アクセントをご教示頂いているのは，黒田(くろだ)クニヱ氏[1]である。黒田氏は，大正7年，旧市内（当時は宇和島町）大浦(おおうら)のお生まれで，市内の小学校（当時の第三小学校），宇和島女学校を卒業後，殆ど宇和島で過ごされ，現在は市内の山際(やまぎわ)地区に住まわれている。

また，この他に，市内中心地域で同じアクセント体系の行なわれている，赤松(あかまつ)，須賀通(すかどおり)，元結掛(もっといがけ)，薬師谷(やくしだに)の各地のデータも適宜参照するが，基本的には黒田氏からのデータがもととなる。

調査票は，最初の調査が文部省重点領域研究『日本語音声（日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究)』の「全国共通項目調査票1990年5月改訂版」から抜粋したもの，その後の語彙データを増やす調査では，主として，上野善道氏の私家版アクセント調査票「A」「B」「C」「D'」を用い，その他に，上野(1995)を主に参考にして作成した調査票による複合名詞とその構成要素，中井編(1997)の中の調査項目，および，私的に編んだ地名などを用いた。なお，音調型の特徴の記述には，自然談話で得た資料も一部活用する。

本稿で扱う調査語彙数（読み上げ式調査分のみ）は，拍数・品詞別に以下の通りである。名詞には，副詞，連体詞，接続詞，感動詞の活用しない品詞も含む。なお，5拍以上の名詞については，複合語を除き（「アレルギー」「インフルエンザ」といった単純語のみ），後部要素の拍数別にその数を挙げる。ただし，前部要素が2拍以上の語（後部2拍語は前部が3拍以上のみ，後部4拍語は前部が1拍の語も含む）である。後部1拍語については，3・4拍名詞として数えた語

と一部ダブる。用言は終止形（基本形）の数を示す。

1拍名詞…89語，2拍名詞…1116語，3拍名詞…2099語，4拍名詞…3948語

5拍名詞…16語，6拍名詞…13語，7拍名詞…5語

後部1拍複合名詞…137語，後部2拍複合名詞…508語，

後部3拍複合名詞…796語，後部4拍複合名詞…232語，

後部5拍複合名詞…35語，後部6拍複合名詞…11語

2拍動詞…146語，3拍動詞…524語，4拍動詞…413語，5拍動詞…135語，

6拍動詞…31語，7拍動詞…8語，8拍動詞…2語，9拍動詞…3語

2拍形容詞…4語，3拍形容詞…68語，4拍形容詞…53語，5拍形容詞…14語

3. 音調型の特徴

3.1. 初頭拍の音階

3.1.1. 調査結果

1.節で見たとおり，先行研究の中で宇和島方言の初頭拍の音調型には，初頭拍から高いものと，2拍目から上昇するものとの二説がある。

筆者の調査において，頭高型以外の第1拍目から2拍目にかけての音階差については，1拍目から高いもの[2]と，2拍目から高くなるものとの二通りの出方があることがわかった。

a).「○○…

b).○「○…

このうち，読み上げ式においては，圧倒的にa).が多くて，b).は少ない。

b).で出た語について具体的に見てみると，1拍目の母音が無声化する語が大半を占める。

チ「トセ’アメ（千歳飴）

フ「クラシコ（膨らし粉）

しかし，1拍目の母音が無声化すると必ずb).で出るわけではなく，a).で出ることも可能なもののようである。

シ「テイ ～「シテイ（指定）

一方，以下のように，a).が出やすい音配列の（1拍目が無声化しない）語でもb).で出た語がごく数例あり（→の左側の例），それらの中で繰り返し発話を確認している語ではa).でも出ている（→の右側の例）。

ケ「ガ’ガナオ’ル（怪我が治る）→「ケガ’ガ

このa).で出やすいと考えられる音配列の語がb).で出る傾向は，自然談話の中で，その語を強調するような場面でよく確認する。

ツ「ガ’ツガ「ト’ワイワンナ’ー（「つがつが」とは言わないねえ）

したがって，a).b).の出方の違いは，音環境や発話スタイルによりある程度支配されるもので，そこには音韻論的な対立は見出せないようである。数的にはa).が圧倒的に多いことから考えると，金田一氏の記述に挙がった音調型が，典型的なものとしては支持される。

なお，この主にａ).が出る傾向は，市内中心地域で同じ体系の行なわれている他地点での高年層を対象とした調査結果とも一致する。

ところで，１.節で確認したとおり，70年代当時の中学生を対象にした真田(1985)，および，篠崎(1987)では，ｂ).が代表的な音調とされている。単純に考えれば，少なくとも本稿での調査より真田(1985)での調査の話者の方が若いということになるから，世代が下がるにつれてａ).は減りｂ).が増えてくるものということになる。篠崎(1987)については話者の年齢等は明らかにされていないが，もし篠崎氏自身の内省というのであれば，氏が少なくとも筆者の話者よりも若いことから考えて，これも世代差であるということになろう。

3.1.2.「○○…は「語」の特徴か「句」の特徴か

ところで，このａ).の音調について，上野(1984)では，金田一(1977)の解釈のような「語」に関する特徴ではなく，「句」に関する特徴とし，福山，尾道方言などと共に，下げ核と｛「○○…｝という「句音調」の総合で出現する形態という解釈がなされている。以下は，このことについて検証する。

先に見たように，第１拍目から高いかどうかということは，弁別的に働いているものではなく，時に両者は混同して現われるようである。これが仮に，「語」の持つ特徴ということであれば，京都方言などの中央式などに観察されるように，二文節以上の連続を一つの句で発音した場合，以下のように，後続文節が高く始まる系列であれば，その第１拍目は，前の文節が有核型の場合でもその文節末の高さに同化することなく，耳で高いと区別できるだけの高さで始まると考えられる。

「タ’カイ[ヤ’マ＝（高い山）

ところが，宇和島方言では，一つの句で発音された場合，後続文節の初頭拍の高さは，必ず前の文節の末拍の高さに同化している（あるいは，高いと区別されるだけ高く出ない)。

「クルマトクルマ（車と車）

「アズ’キトアズ’キ（小豆と小豆）

「カ’ブトトカ’ブト（兜と兜）

この原則が破壊されるのは，強調など，二つ以上の句で発音された場合に限られる。

「コ’コカラ[マ’エ（ここから前［後ろではなく前であることを強調])

このことから，宇和島方言での「○○…という音調は，「語」の持つ特徴ではなく，「句」の持つ特徴と考えるのが妥当ということになる。

したがって，上野氏のいう下げ核と｛「○○…｝という句音調に分析されるとする考え方に，基本的に賛成するものである。

なお，この句頭から高く始まる音調のためか，３拍以上の語については，１型と２型とを時に聴き間違いそうになることがある。また，一度目の調査で２型と記録した語でも，二度目以降の調査で聴くとはっきりとした１型だったものもある（あるいは逆に１型だったものが２型の音調で出たものもある)。話者の型意識の方も，一度目の発話と時間をおいた二度目の発話とで異な

ることもあり，１型と２型との間には，時折ゆれもみられるようである。

3.2. 核の消失

自然談話の中で，少例ながら，読み上げ式では有核型の語が，句頭において無核型の音調（下降なし）で実現されていることがあった。

「オートソレコソ’ヨ（おっと，それこそ［ありがたいこと］だ。）

cf.「セ’ンセガオ’ート，「シアワセヨオモ’ーテ

（先生がおっと［そう言ってくれるから］，幸せだと思って，）

「クーキヌカ’ント（空気を抜かないと）

「セワンナ’イワイナ’ー（世話がないよね）

これらは，話者に「「オートですか，「オ’ートですか？」のように尋ねると，「「オ’ートよ」のように有核型での回答になり，また，読み上げ式の調査でも，

「ク’ーキ（空気）

「セワ’ガ（世話が）

と有核型になる。したがって，句頭で無核になっている現象は，話者の意識にはのぼっていないもののようである。

3.3. モーラ音素と核の位置

宇和島方言では，モーラ音素と核の関係についてはやや複雑である。／ッ／が核を担わないことは各地の方言と共通する点だが，／ー，ン，イ／については，品詞により，拍数により異なりが見られるのである。

まず，名詞では基本的に核を担わない傾向がある。

例えば，２拍名詞では，２型が主な型となる２・３類の中で，２拍目が／イ／の「貝」「姪」は１型である。ちなみに，宇和島以南の方言では２拍目に／ン，ー／を持つ「金」（金属）や「九」などは２型であり，１型の「金」（曜日）や「用」などと対立しているが，宇和島ではいずれも１型で区別されない[3]。

語中にある場合も同様に核を避ける傾向が見られる。複合語の例で検討してみたい。例えば，～町のアクセントは以下のようになる。

「ミマ’チョー（三間町）

ツ「シマ’チョー（津島町）

「アケハマ’チョー（明浜町）

「町」の直前の拍，すなわち二つの要素からなる複合語に分けた場合の前部要素の最後尾拍に核があるという規則があるものと考えられる。

これが，前部要素の最後尾拍がモーラ音素の場合，以下のように核が一拍前へずれる。

「ホナ’イチョー（保内町）

「ミショ’ーチョー（御荘町）

「ジョーへ’ンチョー（城辺町）

これは東京方言などとも同じ，全国的にもよくある傾向である。

ただし，2拍目が長音／ー／の語について，以下のようなその直後で下降する例（→の左側）を拾っている。しかし，いずれも繰り返し発話を求めて意識的に発話して頂いた時には，一拍前後にズレた，長音を避ける形（→の右側）で下降が出る[4]。

「ゾー’キ（雑木）→「ゾ’ーキ

いずれにせよ，例数が少ないことから，／ー／末の下降は偶発的な発話だったのかとも思える。しかし，動詞について見ていくと，どうやらそうではないと見られる例が見つかるのである。すなわち，動詞については，明らかにモーラ音素まで高い音調で出る語がいくつもある。

「トー’ス（通す），「トー’ル（通る），「マイ’ル（参る）

また，以下の例のように対立が見られる。

「トン’ダ（飛んだ）vs.「ヨ’ンダ（読んだ）

「コー’タ（買うた）vs.「ク’ータ（食うた）

「フイ’タ（拭いた）vs.「フ’イタ（吹いた）

ただし，日を改めた調査結果と比較すると語による対立を越えて以下のようなゆれが見られたこともあった。

「オー’タ，「オ’ータ（合うた）

「カ’イタ，「カイ’タ（書いた）

一方，複合動詞および複合動詞的なものについても，以下のような対立が確認される。

「カイ’ダス（買い出す）vs.「ク’イダス（食い出す）

「カイ’ヨル（買いよる）vs.「ク’イヨル（食いよる）

また，形容詞についても，一応次のような例が挙がっている。

「濃イ　　「酢イ　　cf.「無’イ

「濃イ’カッタ　　「酢イ’カッタ　　「無’カッタ

ただし，「濃い」については，「濃’イカッタという例も確認しており，必ずしも安定したものとは言い難い。

このモーラ音素が核を担うことによる型の対立は，おおよそモーラ音素が2拍目にある語に限られるもので，モーラ音素が3拍目にある語については，3拍目のモーラ音素末での下降が期待される語でも，モーラ音素を避ける形で下降が実現される[5]。

「ウト’ータ（歌うた）

「ウタ’イヨル（歌いよる）

「アソ’ンダ（遊んだ）

以上のことから，宇和島方言でのモーラ音素と核の関係については，次のように整理される。

宇和島方言では，基本的にはモーラ音素が核を避ける傾向がある。ただし，動詞を中心に，／ー，ン，イ／が2拍目にある場合は，それらが幾分安定して核を担う傾向がある。

4. アクセント体系と類別体系

4.1. アクセント体系

宇和島方言の4拍までのアクセント体系を以下に示す。

／柄	カゼ	サカナ	ニワトリ
絵'	フ' ネ	ク' ジラ	カ' ルピス
	オト'	ムス' メ	アサ' ガオ
		ミッカ'	アメフ' リ
			イキモノ' ／

「Pn = n + 1」で表される体系である。

4.2. 類別体系

3拍までの類別体系（いわゆる金田一語彙に基づく）を代表的な型とともに示せば以下のようになる。なお，動詞・形容詞は終止形のものを示す。また，動詞は活用の区別なく示す。なお，3類は五段動詞のみ。2拍動詞の「居(お)る」は3類とする。

1拍名詞：1・2類（0型）／3類（1型）

2拍名詞：1類（0型）／2・3類（2型）／4・5類（1型）

3拍名詞：1・6・7ｘ類（0型）／2・4・5・7ｚ類（2型）／7ｙ類（1型）

2拍動詞：1・3類（0型）／2類（1型）

3拍動詞：1類（0型）／2・3ｚ類（2型）／3ｙ類（1型）

3拍形容詞：1類（0型）／2類（2型）

3拍名詞7類は，語により0・1・2型に分化しており，特定の代表的な型を決めかねる。ここでは，便宜的に型に基づき7ｘ・7ｙ・7ｚ類に下位分類する。

0型…苺，辛子，薬，盥(たらい)，鉛，畑　…7ｘ類

1型…後ろ，蚕，兜(かぶと)，鯨，便り，椿，病(やまい)　…7ｙ類

2型…卵，千鳥，一つ，一人，緑　…7ｚ類

このうち，「後ろ」については，この話者は2型だったが，宇和島方言の別の話者では1型も確認しており，また，筆者の調査による限り，宇和島以南の地域の広い範囲にわたっておおむね1型であることから7ｙ類とした。また，「病」には2型も確認されたが，これもこの辺り広域的に1型が典型であることから7ｙ類とした。

7類語が複数の型に分化する現象は，それぞれの型の所属語彙を一部異にしながらも，他のいわゆる東京式の地域にも見られるものである。東京方言でも，「畑」などは0型で「椿」などは1型，「卵」は人により2型と0型である。西日本でも，似たような分化は，神鳥(1977：665-666)の広島市祇園町のデータで，また，添田(1990：39)の山口市のデータで知られる。一方，四国西南部のいわゆる東京式の地域については，山口(1986：212-213)により高知県宿毛市のものが知られるほか，筆者も宇和島近辺や高知県西南地域において似たような分化のあることを確認している。

この他，3拍名詞には3型の所属語彙が少なく，2・4類がほぼ5類と合流している点も特徴的である。

ところで，3拍動詞の「歩く」が1型であることが金田一(1977：167)で紹介されているが，その「歩く」が属する3類については，他に「入る」も1型である。ただし，「隠す」「参る」は2型だった[6]。そこで，これについても便宜的に二つに下位分類する。3拍名詞の型との対応にあわせて，1型の「歩く」「入る」を3ｙ類，2型の「隠す」「参る」を3ｚ類とした。

なお，篠崎(1987：4-5)の「地方別音韻表」に挙げられたものは，東京と全く同じもので，今回の調査結果はそれとは異なる結果となった。

5. 所属語彙の特徴

5.1. 3・4拍名詞の尾高型

5.1.1. 3拍名詞

宇和島方言では，3拍名詞尾高型（3型）の例が僅少である。今回調査した2099語中，3型の例をすべて以下に挙げる。

a).三つ，六つ，八つ，四つ　…2類語。
　相手，あっち，こっち，ごっちゃ，通り（声の），どっち，拍子（～をとる），みんな
b).二つ　…2類語
c).集め，その日，回り（酒の～が速い）
d).男，表　…2型との併用。
e).所，一度，手打ち，三河　…0型との併用。
f).内子（地名）　…0，2型との併用。

このうち，a).については，2拍目がモーラ音素という点で共通している。

b).の「二つ」は，同じく数詞で2類語の「三つ」「六つ」などの影響もあるか。

c).のうち，「集め」「回り」は動詞からの派生名詞である。ただし，「回り」については，「家の回り」の意味では0型，「独楽の回りが速い」等の意味では1型で，3型になるのは「酔い」や「薬」等の効果が回る意味の時のみのようである。

「その日」は「連体詞＋1拍名詞」で，もともとが2語である。「日」は0型だから，この語の型がそのまま活かされているという訳ではない。ただ，「その日」は東京方言などでも3型で，「日」に着目すれば，型の交替が起こっていることになる。

d).は，単独形と文節形（＝単独形＋「が」）ではいずれも2型で，短文形（＝文節形＋述語文節）でのみ3型が確認されたものである。その短文形でも，再び発話をお願いすると2型も確認された。

e).の「手打ち」については，うどんなどの製造法の意味では必ず0型で，時代劇などに出てくる「手打ちにしてくれる！」等の意味だと0型の他に3型も有り得るようである。

f).の「内子」は，愛媛県内の地名だが，2拍目は無声化するから音配列的に2型を避けて3型になりやすい。

5.1.2. 4拍名詞

4拍名詞で尾高型（4型）が確認されたのは，「わいわい」「ががや」といった畳語を除くと，調査した3947語中，わずかに以下の例のみである。

a).生き物，生け花

b).この人

c).あんまり（な），色々（な），横着（な）

d).ふたあつ（「二つ」の方言形）

a).について。単独形はいずれも3型であり，繰り返し発話を求めた際には，文節・短文形でも3型を記録している。

そして，

「イキモノ'ガですか？「イキモ'ノガですか？

のように尋ねると，

「イキモ'ノガ，よ

という回答すなわち3型の音調でも出た。

ところで，これらと語構成の似ている語について見てみると，次のようなことになる。

まず，「生き物」など「動詞の連用形＋物」という語構成の4拍語については，前部要素が無核型であれば全体も無核型になり，前部要素が有核型であれば全体も有核型になる傾向があるようである。

前部要素無核型の語：売り＋物，置き＋物，買い＋物，焼き＋物　⇒0型

前部要素有核型の語：出し＋物，縫い＋物，食べ＋物，持ち＋物　⇒2，3型

「生き物」は前部要素が有核型の語であり，全体も有核型であることが予想される。そこで，同様に有核型が予想される語について見てみると，「食べ物」が2型なのを除くといずれも3型であり，4型は一例も記録していない。

また，後部要素が「花」の4拍語は，他に「押し花」「草花」を聴いているが，いずれも3型であった。

b).の「この人」については，後部要素「人」が2型であることから，「この＋人」という意識で発音された可能性もあろう。繰り返しの発話で3型を確認しており，また，これと同様の語構成の「あの＋人」については3型のみであった。

c).はいずれも形容動詞（宇和島方言の形容動詞の終止形は「～な」）の用法で確認されたものである。

d).の「ふたあつ」は「二つ」の方言形で，「二つ」を聴いた際に，方言形ではこう言うという風に話者の方から呈示されたものである。単独形も無核だった。「二つ」が安定した3（尾高）型であることも影響するか。

ところで，4拍名詞の4型は東京方言などでも世代を追う毎に数を減らしているが，「弟」「妹」のような3拍目がモーラ音素の語，あるいは，「税務＋署」「二番＋目」などの「署（所）」「目」といった特定の後部要素の語を中心に見出すことが出来る。

しかし，宇和島方言では，「妹」は0型と2型，「弟」「税務署」「二番目」はいずれも0型であった[7]。

次に，畳語の中に確認された4型を見る。

宇和島方言の畳語は，

ピカピカニミガク（〜に磨く）／ピカ’ピカヒカ’ル（〜光る）

ギューギューノデ’ンシャ（〜の電車）／ギュ’ーギューツメ’ル（〜詰める）

のように，副詞的な用法（上記の／より後ろの例）だと2型ないし1型で，名詞的な（助詞を伴う修飾句的な）用法（上記の／より前の例）だと0型が基本のようだが，名詞的な用法においては，

デコボコ’ノミチ（道），ガラガラ’ノバス

といった例も挙がっている。

5.1.3. 尾高型の減少

こうしてみると，当方言では，拍数が増えるに従い，尾高型の所属語彙数が減ってきていることが予想される。

一般に，3拍以上の尾高型は嫌われる傾向があるようで，東京方言などでも，0型や-2型への変化が進んでいるようであるが，宇和島方言でも同様の傾向が，東京方言などより更に著しい形で確認出来るものといえよう。

5.2. 4拍名詞頭高型

4拍名詞では頭高型の所属語彙も少ない。その殆どは，2拍目がモーラ音素の語で，それ以外だと以下のようなことになる。

a).数々，ゴトゴト，みるみる，やれやれ，…

b).かえって，とにかく，ともかく（2型も），とやかく（2型も），…

c).アルバム（2型も），カルピス，コスモス，ホルモン，マフラー，ルンペン

d).黒んぼ（2型も），けちんぼ

e).満ち引き，善し悪し

f).卯の花，数の子，菜の花

g).奥さん，神様（2型も），花ちゃん，星さん，…

h).待ち針

a).は畳語，b).は副詞，c).は外来語（および和製の外来語的な語），d).は蔑視語，e).は対称的な意味を並べた構成の語で，前部要素が頭高型，f).は「AのB」という語構成の「A」の部分に頭高型の語が入る。g).は「名称＋敬称」の類い。h).は前部要素が頭高型の動詞である。

a).について。当方言では，畳語には1型と2型が現われるが，その出方には，2拍目がモーラ音素の語が1型に限定される点を除くと，語構成や意味的な面での共通性は特に伺えない。

d).のような蔑視語が頭高型になりがちな傾向は，いわゆる東京式の地域に共通する現象である。

5.3. 動詞

ここでは，4拍以下の単純語を主に検討する。複合語については名詞とまとめて後で述べる。

5.3.1. 3拍動詞の1型

3 y類に属さない語の中で1型になった語は，いずれも五段動詞の以下の語である。

泳ぐ，通す（2型も），頼る　…五段2類

居付く（[野良猫などが～]，2型も，着出す，尖(とが)る，申す，

吃(ども)る，籠(こも)る，出会う，詰まる，見出す，潜(もぐ)る　…類別語彙以外

このうち，「居付く」「着出す」「出会う」「見出す」は複合動詞である。しかし，複合動詞がすべて1型かというとそうではなく，「着込む」「寝付く」「似合う」などは2型であった。

また，それ以外の「頼る」「尖る」「吃る」「潜る」は，いずれもラ行五段動詞である。

5.3.2. 4拍動詞の1型

当方言では，4拍動詞にも安定した1型が確認され，頭高型動詞の殆どない東京方言などとは異なる傾向を示している。

a).落ち着く，書き出す，踏ん張る…

b).泳げる

c).抑える，構える，答える　…一段2類

抱える，支(ささ)える，捕らえる　…一段3類

加える，(口に)銜(くわ)える，堪(こら)える，栄える，(喉に)支(つか)える，結わえる　…類別語彙以外

このうち，a).は複合動詞であり，5.5.6.節に後述の複合動詞アクセント規則が適応された形と考えられる。ちなみにいずれも五段動詞である。

b).は可能動詞。他の前部要素1型の可能動詞の例「歩ける」「入(はい)れる」などを確認して同様の1型になるか検証してみる必要があろう。残念ながら，それらの語は，これまでのところ未調査である。

c).について。2類語の一部と3類語の約半数が1型なのは，3拍動詞の五段3類に共通するものである。なお，これらはすべて「～える」という形で共通していることからまとめたものである。ただし，「～える」形がすべて頭高型かというとそうではない。語による違いも充分考えられる。なお検討の必要な事例である。

5.3.3. 2・3拍動詞過去・完了形

2拍動詞の過去・完了形は，類別との間に次のような型の分布を示す。まず，五段動詞の例である。

1型　合うた，書いた，飲んだ，…（2類）

2型　押した，聞いた，泣いた，…（1類）

0型　行った，売った，乗った，…（1類）

2類語の方はほぼ1型で安定している。

1類は，促音便形とそれ以外で型が異なっている。この傾向は，筆者の調査による限り，宇和島以南，高知県西部にかけてのいわゆる東京式の地域に広く共通する現象でもある。

なお，「居った」は1型である（終止形「居る」は0型）。

続いて一段動詞を示す。

0型　着た，寝た，した，出た，見た，来た（1・2類）

すべて，0型で統一されている。

次に，3拍動詞について。まず，五段動詞は以下の通りである。

0型　上がった，送った，止まった，…（1類）

1型　泳いだ（2類），歩いた，入った，…（3 y類）

2型　遊んだ，続いた，鳴らした，…（1類），

思うた，頼んだ，通った，…（2類），隠した（3 z類）

2・3類について，1型と2型の分布は，終止形の型と並行している。1類については，2拍語と同様に，促音便形が0型でそれ以外が2型という具合に基本的に分かれる。

一方，一段動詞は次のようになる。

1型　起きた，降りた，建てた，延びた，…（2類）

2型　入れた，消えた，着せた，曲げた，…（1類）

1類＝2型／2類＝1型の対立である。

5.4. 形容詞

4拍語の終止形は，「アカル’イ（明るい），「オーキ’イ（大きい）のように，おおよそ全てが3型の音調で出る。ただし，時折，「クヤ’シイ（悔しい），「オー’キイ（大きい）のように，2型の音調で出ることもあるが，繰り返しの発音では3型の音調で出た。

過去形についても，3拍語については終止形に並行して対立があるが，2拍語にはない。

2拍語：酸イ（0型）－酸イ’カッタ（2型）

／良’イ（1型）－良カッ’タ（2型）

3拍語：アカイ（0型）－アカ’カッタ（2型）

／ハヤ’イ（2型）－ハ’ヤカッタ（1型）

5.5. 複合語

ここでは，上野(1997)を参考にしながらごくかんたんに分析する。

宇和島方言の複合名詞は，基本的に前部要素の型は全体の型に関与しないタイプ（Y型）だと考えられる。そこで，後部要素に着目して分類して見ていく。

5.5.1. 後部1拍複合名詞

前部要素が2拍以上の語について見ていくと，おおよそ全体が次の二つの型に分かれる。

0型　音楽家，天ぷら粉，標準語，働き手，…

-2型　伊予市，格子戸，糸切り歯，送り火，…

この他，「訪問着」「救急車」など，-2拍目がモーラ音素の語は，核が前にズレて-3型になっている。

ところが，-2拍目がモーラ音素以外でも，「文学部」「川崎市」「盛岡市」の三語は-3型の音調で出た。

このうち，「文学部」は「文＋学部」と意識して，後部3拍語のアクセント規則が適用されたのかも知れない。また，「川崎市」と「盛岡市」については，語末の「市」にプロミネンスが置かれて卓立し，拍内下降で出た（「カワサ’キ「シ”）ため，繰り返し発話を求めると，-2型の音調で出た。似たような語構成の語を発音してもらう際に出てくるリズムによる現象だと考えられるが，だとしても，「カワサキシ”～「カワサキ’シ”という音調で出てもいいわけで，後部要素に同じ「市」を持つ語彙を増やした調査を行ない尚一層の検討をしてみる必要はあろう。ちなみに，前部要素「川崎」「盛岡」はともに2型だった。

こうした例外的な音調を除いて眺めると，後部1拍の複合名詞のアクセントは後部要素によりほぼ決まるものと考えられる。すなわち，以下のような傾向がある。

粉，語，後，所，手，目，屋 ⇒ 0型

着，機，市，車，戸，歯，火 ⇒ -2型

なお，全体が3拍（前部要素が2拍）の語については，上記の傾向が当てはまらないものがある。

「屋」：飴屋，桶屋，靴屋，米屋，蕎麦屋，飲み屋，花屋 ⇒ -2型（2型）

このうち，「飴屋」を除き，前部要素が有核型である。

上野(1997：241)によれば，東京方言など，複合語のアクセントが基本的に後部要素によって決まる方言でも，前部要素が2拍以下の場合には，前部要素のアクセントが全体のアクセントに影響することがあるようである。

宇和島方言の例も，同じ現象だと見られる。ただし，「飴屋」は前部要素の「飴」が0型なのに0型ではない。同様の条件の「酒屋」は0型である。これは，恐らく，「飴屋」というものにそう馴染みがなく，したがって「桶屋」などの形に牽引されたものではないかと考える。

5.5.2. 後部2拍複合名詞

これはかなり複雑である。結局は，語ごとに指定しないといけない部分も多々あるようだが，前部要素が3拍以上の語については，ほぼ決まった傾向と見られる現象として，後部要素により，全体が特定の型にしかならないものがあるということはいえそうである。

まず，全体が平板型にしかならない後部要素としては，以下の語が挙がる。代表的な語例もあわせて示す。

芋（薩摩芋），色（赤紫色），側（反対側），事（考えごと），状（格子状），

製（外国製），焼き（お好み焼き），行き（宇和島行き），…

3類語の一部や漢語，動詞からの派生名詞が多いようである。

次に，全体が～＋○’○（-2）型にしかならない後部要素に以下のような語が挙がる。

C（ビタミンC），蕎麦（立ち食い蕎麦），ドア（回転ドア），バス（高速バス），…

いずれも，後部要素自体の型が頭高型の語である。

ところが，後部要素が頭高型以外でも-2型となる語もある。そしてそれらは語により同時に0型や～＋’○○（-3）型の場合もある。

心持ち　…　ココ’ロ＋モチ → ココロモ’チ，ココロモチ

出入口　…　デイ’リ＋クチ → デイリグ’チ，デイリ’グチ

このうち，後者の「出入口」の例のような-2型と-3型との間でのゆれが，当方言での後部2拍語での型のゆれとしては最も多いタイプである。

一方，全体が-3型（ただし，モーラ音素の影響で核が1拍前にズレるものあり）にしかならない語もあった。

愛（郷土愛），カー（スポーツカー），券（定期券），蜂（働き蜂），

マン（セールスマン），…

漢語，外来語に多いか。

また，前部要素内に核のある語も見つかった。ただし，これは規則的にそうなるのではなく，語によりそうなるものがあるというものらしい。

イサ’ミアシ（勇み足）　cf. ウシロ’アシ（後ろ足）

タタ’キウリ（叩き売り）　cf. クスリ’ウリ（薬売り）

ハナ’シガイ（放し飼い）　後部要素の同じ語例なし

アケハ’マチョー（明浜町）　cf. シロカワ’チョー（城川町）

トクシ’マケン（徳島県）　cf. ワカヤマ’ケン（和歌山県）

前部要素が動詞からの派生語，あるいは複合動詞からの派生語に準じる形，また地名に多いようである。

5.5.3. 後部3拍複合名詞

有核型は，-3型が最も多い。それ以外は，調査した796語中，他の型との併用のある語も含めて55語（6.9%）が-2型であった。また，-3型には解釈したが実際には下降が遅れ気味に聴こえたものが14語（1.8%）あった。

-2型で安定していると考えられるのは以下の語である。これらは，繰り返し発話を求めても-2型以外で出ない。

a）.女詐欺師，立ち食い蕎麦屋，おぼろ月夜，一杯飲み屋

b）.白石蔵王

a）.は後部要素が2型で，しかも複合語であることが明白な語であり，後部要素自体の複合語

規則が関わっているとも考えられる。

b).の「蔵王」は末尾拍が／ー／であることと関係するか。上野(1997：239-240)によれば，東京方言では，「裏日本」「コバルトブルー」など末尾拍がモーラ音素（促音を除く）の2型の語（しかも，固有名詞に多い）に-2型が（安定して）あるらしい。これと共通する傾向か。また，この語は，話者にとってなじみのある語とは言い難いであろう。

-2型と-3型の両方が現われる語の後部要素を見てみると，それ自体の型が2型の語，例えば「－心」「－花火」などにその傾向が強いことがわかる。それに加え，「－時間」「－作業」（これらも本来の型は2型）など，末尾拍がモーラ音素の語にもこの傾向が多く見られる。

ただし，一方で，東京方言で-2型の「ねずみ小僧」が-3型で出る（宇和島方言でも「小僧」は2型）など，この「末尾拍がモーラ音素の2型」ということは，必ずしも安定した傾向を生む条件とはなっていない。

他に，0型は有核型との併用例9例を含めて58例（7.3%）あり，以下のような傾向が見られる。

複合動詞からの派生語：通りがかり，すれ違い，かっぱらい，…

後部要素が動詞からの派生語：雲隠れ，鷲摑(わしづか)み，逆戻り，…

前部要素が様態的な意味：長ズボン，角砂糖，掛け布団，…

また，「一通り」「七時間」など前部要素が数詞のものもあるが，これらは広くは「様態的」な意味に含まれると見る。

なお，「基礎工事」も0型だったが，この「基礎」も「基礎的な」という意味では「様態的」といえるか。

5.5.4. 後部4拍複合名詞

有核型は，アソビト’モダチ（遊び友達），ムラサキタ’マネギ（紫玉葱）などのような-4型が多勢である。その中で-3型になるものは以下の語である。

アイスクリ’ーム，ソフトクリ’ーム，バタークリ’ーム…

キューブレ’ーキ（急ブレーキ），ヒジョーブレ’ーキ（非常ブレーキ），…

トマトケチャ’ップ

後部要素が2型で3拍目がモーラ音素という共通点がある。

5.5.5. 後部5拍以上の複合名詞

後部要素が5拍以上の語では，基本的に後部要素の型を保存している。

シツレン　＋レ’ストラン　→シツレンレ’ストラン（失恋レストラン）

カフン　＋アレ’ルギー　→カフンアレ’ルギー（花粉アレルギー）

アロエ　＋ヨーグ’ルト　→アロエヨーグ’ルト

グリ’ーン＋アスパラ’ガス→グリーンアスパラ’ガス

5.5.6. 複合動詞

おおよそ，後部要素のアクセントは関係せず，前部要素が有核型の場合前部要素内の拍に核があり，前部要素が無核型の場合，両要素の切れ目の直前の拍に核がある傾向がある。

オモ’イ（思う）＋アガル（上がる）→ オモ’イアガル（思い上がる）
チジム（縮む）　＋アガル（上がる）→ チジミ’アガル（縮み上がる）
カ’ク（書く）　＋ト’ル（取る）　→ カ’キトル（書き取る）
カウ（買う）　＋ト’ル（取る）　→ カイ’トル（買い取る）

秋永(1981)で報告される古い東京語と東京の周辺部，また，馬瀬他(1995)に報告される広島市方言などでの傾向にも通じるものである。

ただし，後部要素が3拍以上の語では，

ト’リチラカ’ス（取り散らかす），マケ’ハジメ’ル（負け始める）

のように，一度要素の切れ目で下降した後，更にもう一度（後ろから2拍目）で下降する2単位形と解釈される音調もあわせて聴かれることがある。なお，上記の例の後部要素「散らかす」「始める」はともに0型である。

また，7拍以上になると，前部要素に1型が期待されるような語でも2型になるものがある。

オ’ヨグ（泳ぐ）＋ハジメル（始める）→ オヨ’ギハジメ’ル（泳ぎ始める）

6. 全国のアクセント分布の中の位置の確認

宇和島方言アクセントは，前述の通り，金田一氏の一連の分類ではいわゆる東京式の中でも「内輪式」に分類されている。その根拠は，金田一(1977)の以下の記述に見つかる。

> 一拍語の所属からいくと中輪東京式であるが，「動詞＋」の形などから見るとこれは内輪東京式である。（金田一 1977：155）

ここで，氏の言う“「動詞＋」の形”の具体的なものが不明である。「光る波」などの形を言うのか。

一般に内輪式と中輪式の区別のポイントとされているのは，1拍名詞の類別体系が，内輪式の「1類／2・3類」に対し，中輪式の「1・2類／3類」という点や，3拍形容詞が，内輪式では2型一型で区別が無いのに対し，中輪式では1類の0型と2類の2型に区別されているという点である。この二点については，宇和島方言は中輪式と共通する。

一方，内輪式と中輪式の相違点として，金田一(1977)に更に挙がっているのは，2拍五段動詞の－テ形の型である。金田一（1977：167-168）に述べられた内容をまとめると以下のようになる。

「飛んで」「買って」：内輪式＝○○’　○／中輪式＝○○○

宇和島方言では，「－テ形」の型は過去・完了形と同じで，「飛んで」に関しては2型だから内輪式に共通することになるが，「買って」は0型で中輪式と同じ型である（ただし，方言形は「コー’テ)。これは，前述の通り，促音便形とそれ以外で相補分布になっているのだが，宇和島方言では，この点においては，内輪式と中輪式の特徴が混在していることになる。

こうしてみると，内輪式の特徴を部分的に有しながらも，中輪式の特徴により合致する体系であるといえる。

この他，3拍動詞3類に1型があって2類と分かれている点，3拍名詞の2～5類がほぼ合流している点などの特徴があるが，これらは，通時的にも，類推変化が起こっていない[8]とか，いわゆる昇核化により核が前にズレたなどの観点で，体系の根幹の変化とは別に説明がつくものである。それより，複合動詞の規則などでも広島や山口などとの共通性が見られることから見ても，全国のアクセント分布の中に位置づけるとすれば，やはり，そうした地域と同じく「中輪式」の体系とみるべきものと考えられる[9]。

注

1 ここでお名前を挙げることについては，ご本人からの承諾を得ている。

2 この音調については，出だしから高く聴こえる。すなわち，高さのピークはかなり早い（東京方言などのように遅れていない）と見られる。

3 ただし，「バイ・「バイ’ニナル（倍になる）という例があった。これはその後の調査で1型も確認している。

4 なお，上昇に関しては，強調したような発音では，○「ー’○○のようなのも聴かれるが，いずれも，繰り返し発話を求めると，下降がモーラ音素を避けて1拍前にズレた形の頭高で実現した。これらはあくまでイントネーションのレベルでのものであると考えられる。通時的には，アクセント変化を引き起こす可能性を孕むものかも知れないが。

5 ただし，禁止形で以下の例を確認している。
ウタウ’ナ（歌うな）cf. タノ’ムナ（頼むな）

6 「参る」には1型もあるか。周辺地域では1型と2型で，人により，また，同一個人内でもゆれている。

7 「妹」に2型があるなら，類推で「弟」にも2型がありそうだが，0型のみであった。あるいは，多人数調査を進めれば他の話者から出て来るかも知れない。

8 金田一(1977：167)。

9 四国西南部の東京式を，内輪式でなく中輪式と捉えるべきという見方は，山口(1986)において，高知県宿毛市とその周辺部での動詞の各種活用形などのデータをもとにした検証に基づく見解がある。

引用文献

秋永一枝(1981)「アクセント習得法」『明解日本語アクセント辞典（第2版)』，付1-88，三省堂

上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集第2巻　言語学編』，390-347，三省堂

上野善道(1995)「松山市方言のアクセント調査報告」『愛文』30，1-30

上野善道(1997)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修・国広哲弥他編『日本語音声2　アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』，231-270，三省堂

神鳥武彦(1977)「Ⅷ言語地域—発音の特色—」『広島県史　地誌編』，571-705

金田一春彦(1940)「國語アクセントの地方的分布」国語教育学会編『標準語と国語教育』，59-100

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的変遷　原理と方法』塙書房
金田一春彦(1977)「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語11　方言』，129-180，岩波書店
真田信治(1985)「語アクセントの地域差と個人差—南予地方での事例研究から—」『国立国語研究所研究報告84 方言の諸相「日本言語地図」検証調査報告』，321-380，秀英出版
篠崎充男(1987)『宇和島の方言—語と語彙—』私家版
杉山正世(1960)「宇和島市沿海地区のアクセント」『愛媛国文研究』9，75-83
添田建次郎(1990)「山口市内の方言アクセント—「共通語」化の側面を中心に—（二）」『山口国文』6，38-51
中井幸比古編(1997)『高知市方言アクセント小辞典』1997（平成9）年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号09610542「京都アクセントの記述調査研究と辞典作成」研究成果報告書研究代表者 神戸市外国語大学外国語学部助教授中井幸比古
平山輝男(1957)『日本語音調の研究』明治書院
馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵(1995)「広島市方言語アクセントの特徴と世代的変動—『広島方言アクセント辞典』の資料をもとに—」『日本方言研究会第61回研究発表会発表原稿集』，25-34
山口幸洋(1986)「四国西南部東京式アクセントの性格」広島方言研究所編『方言研究年報通巻第29巻　方言研究の体系的推進』，205-218，和泉書院
山名邦男(1956)「四国の音調」『国学院雑誌』57(2)，24-36

謝　辞

幾度も宇和島方言アクセントをご教示頂いた黒田クニヱ氏に心よりお礼申し上げる。

また，本稿は，筆者の博士論文の一部を，公開審査の内容を踏まえて改訂したものである。その審査において，主査の荻野綱男氏，副査の上野善道氏と小林賢次氏よりご指導頂いている。特に上野氏からは大変詳細なご指南を頂いた。お礼申し上げる。

本誌査読委員の方から，詳細かつ有益なご指導を頂けたことにもお礼申し上げる。

なお，引用文献のうち，篠崎充男(1987)は稲田篤信氏より頂戴した。お礼申し上げる。

（投稿受理日：2005年8月1日）
（最終原稿受理日：2005年11月30日）

清水　誠治（しみず　まさはる）
HZI06256@nifty.com

Japanese Linguistics 19 (April, 2006) 99–118 〔Report〕

A report on the Uwajima dialect accent

SHIMIZU Masaharu

Keywords

Uwajima dialect, accent pattern, Churin-type,
the accent of compound verbs and the accent of compound nouns

Abstract

Rather than the Keihan-type accent that has a wide distribution throughout Shikoku, the accent of Ehime Prefecture's Uwajima dialect is more similar to a Tokyo-type accent. For this reason, it has long held the attention of the linguistic community. Nevertheless, a concrete assessment of this dialect has not been undertaken previously. This paper is the first concrete report on the subject.

The key points in this paper are as follows. The Uwajima dialect is characterized by high-pitched accentual phrase initial intonation patterns. With verbs, moraic phonemes can bear the accent kernel. The tonal classes of three-mora nouns do not follow a "2·4/5" pattern, but rather a special "2·4·5" pattern. The accent of compound verbs follows the pattern of the Hiroshima dialect. If one were to position the Uwajima dialect on a national accent distribution map it would be subcategorized as a Churin-type, which is the same as the Tokyo dialect and the Hiroshima dialect.